

東方人菜録

厄丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東方project それは本来なら主人公が複数いる女子達が最強である世界。

その男は弾幕ごっこには興味がなく野菜などを育てていればよかったのだ、そう、邪魔さえ入らなければ。

たまたま育てている場所が悪かった？

たまたまそこにいたのが悪かった？

たまたま自分が男なのが悪かった？

否、神聖なるその畑に入り込んでしまっている異変が悪いのだ。

「は？畑に無法で侵入している奴がいる・・・？」

許さない

※この作品は様々な作品の1部の技を使います、ワンピースの武装色の覇気やドラゴンボールの東方projectでは絶対にありませんのでご了承ください。

基本ギャグ100%にしますのでお気に召さなかったらブラウザバックを推奨します。

目次

プロローグ 幻想入りとかいマサラタウン	1
ワンピースの技は汎用性高い、使っちゃうもんねー！ あ、お前は場	
外ホームラン	4

プロローグ 幻想入りとかいマサラタウン

《博麗神社》

ここは幻想郷、忘れ去られたモノがいずれたどり着く幻想にまみれた不思議な世界。

そんな幻想郷のある神社に住んでいる可憐な少女たち、いつもの如く縁側でお茶をすすりながら楽しそうに駄弁っている姿が見て取れた。

「はあく……ここ最近暇ね。異変も起きていないし、何か面白いことでも起きないかしらね？」

楽園の素敵な巫女さん 《博麗霊夢》

この幻想郷を守る博麗の巫女。

本人は努力が嫌いを持ち前の勘となんでもこなせる天才的な才能を持つている楽園の素敵な巫女さん（笑）

『努力？しなくても勝てるからいいのよ、めんどいし』

「なんか馬鹿にされた気がするわね……」

「そんなことないだろ、だが確かに最近は何も起きないで暇だな……」

白黒の普通の魔法使い 《霧雨魔理沙》

霊夢の昔からの友人で霊夢とは違いかなりの努力家。

今も昔も勝てていないが弾幕ごっここの実力は幻想郷の中でもかなりのモノ、大体の奴には負ける気がしないもう一人の主人公。

『私が霧雨魔理沙様だ！霊夢にいつまでも負けているわけにはいかないのぜー！』

「あー、だがおかしな奴はいたな」

「おかしな奴？そんなの幻想郷ではいつものことじゃない」

「それは分かるんだが飛びぬけておかしな奴でな、普通なら慌てふた

めいてビビってるか自暴自棄なるものだろ？ 外来人は」

外来人、幻想郷にたまたま入り込んでしまった幻想郷の住民ではない世界の住民の総称。

「なんと野菜を育てていたんだ！」

「え、野菜を・・・？ そんな素敵なものを・・・?!」

「ああ、かなり育っていた様子だったな。もしかしたらもう自分の世界に帰るつもりがないかもしれないぜ」

霊夢の目が明らかに煌びやかになっている、魔理沙はその様子を見てやれやれとため息をついてお茶を再度すすする。

しかしここで空が急激に紅く染まっていくのが見えた、様子からして怪しげな気配を纏っており体にはよくなさそうなのが見て取れる

「おつと？ 霊夢これは・・・！」

「ええ、間違いないわね！」

「異変ね！（だぜー）」

こうして紅魔郷のダブル主人公、博麗の巫女と白黒の魔法使いは異変の元凶へと飛んでいく。本来であればこの2人が主人公として進んでいく紅魔郷。

しかしこの幻想郷には異例の存在がいてしまった。

《巨大な湖の前》

「ふう、やっと収穫できるぐらいに成長したな」

この男こそ魔理沙が言っていた謎の人物である。

「人参はあともうちよいか、夏だからカレーにしたらきつと美味いぞ！ 魚たちもいい頃合いだな、シチューにしても美味いんだよこの魚は！」

そういつて男はクワを肩に担いで自家製の小屋へと帰ろうとする。

しかしその瞬間、巨大な爆発音とともに自分後ろから強烈な風が吹き溢れるのが分かってしまった。

「え?! 何?! 何事?!」

男は音がした方を見て絶句してしまっている。

「は……え……?ちよ……はあああああ?!!」
その光景は男にとつてあまりにも悲惨な状況だった。

丹精込めて育てていた野菜はぐちゃぐちゃ、ジャガイモは潰れ人参は割れてしまっている。玉ねぎに至ってはあのみずみずしい外見は留めておらず見るも無残な姿へと豹変してしまっている。

「ぎ、魚たちは?!」

湖に作った簡易的な生け簀は無事だが急激に気温が低下し体に良くはないであろう煙を吸い込んでしまったようでかなり弱っている様子が見受けられる。

「誰だ……一体どこのどいつがこんなことしやがったあああああツ!!!」

男は激怒する、丹精込めて育てた野菜は目の前に現れた屋敷によって引き起こされたものだど理解するには十分だった。

「絶対に許さねえ……!俺達の努力の結晶を一瞬で無駄にしやがって!!!」

男の名前は黒巻蒼紫^{くろまき あおし}。本来の幻想郷とは違う、IFの世界の幻想郷を題材とした東方projectの二次創作である。

ワンピ〇スの技は汎用性高い、使っちゃうもんねー！
あ、お前は場外ホームラン

法の森上空》

「おかしいわね、いつもなら邪魔をしてくるやつが必ずいるのだけれど今回はいない・・・？」

「ああ、魔法の森がこんなにも静かなのはさすがにおかしいぜ」

霊夢と魔理沙は魔法の森を飛んで湖畔へと飛んでいく、何故湖畔かというとき霊夢が『勘よ』と言ってそれに魔理沙がついていく形となっている。

「霊夢の勘は異常な程当たるからな、何故か金関係には働かんけど」

「本当になんでかしらねえ・・・つと、あそこにいるのは常闇妖怪ね？」

ふと目を前に移すと漆黒の服に身を包み頭に赤いリボンを付けた小さな妖怪がこっちに向かって飛んでくる。

「あ！そこの人間！あなた達は食べていい人間か？！じゃなくて！助けてほしいのー！」

「常闇妖怪が私たちに何の用よ」

「ルーミアだ！」

「一体どうしたんだルーミア、しかも飛んできた方向は湖の方じゃないか」

なんと湖の方からルーミアは飛んできた、しかもだいぶ焦った様子で飛んできており余裕はあまりなさそうにも見える。

「向こうで蒼紫と紅い館の門番が戦ってるのだ！」

「蒼紫？って誰よ」

「蒼紫はかなり前に湖の近くに来た外来人なのだ！それが畑を壊されて怒り狂って妖怪に無理な戦いを!!」

その様子を聞いて霊夢と魔理沙は焦った様子で顔をしかめる、顔を見合わせて急いで湖の方へと飛んで行った。

少しさかのぼり入口兼畑跡地

「てめえらか！俺達の焔を台無しにしやがったのは!!」

「え、ええ……私にそんなこと言われましても……」

「そんなこと……？焔のことか……ッ！」

彼女、紅美鈴は選んだ言葉を間違えた、『そんなこと』この一言で彼を激怒させるには十分すぎる発言だったのだ。

「焔のことかあああああああッ!!!」

「え、ちよ、普通の人間がなぜこんな力を?!」

蒼紫は手を真つ黒に変えて叫ぶ

「武装色硬化ッ！」

「その力は……!」

「いいからさっさと！俺たちの焔を返せえええええええッ!!!」

蒼紫は武装色の覇気を使って美鈴に殴りかかる、普通の人間が腕を真つ黒にしてきたのがよほど驚いたのか一発顔に良いのをもらってしまった。

「……ねえ、魔理沙」

「なんだ、霊夢」

「そっちがその気ならわたしmちよちよちよ！始める前の挨拶ぐらいさせてくださいよ！」

「知るかぼけえ！神聖なる焔を汚し自然の恵みとなる美味しい美味しい野菜達を目の前でぐちゃぐちゃにされて俺は今猛烈に腹が立つてるんだ！責任者を出しやがれぶっ殺してやるッ!!!」

「彼は本当に人間なのかしら？見たところかなりの霊力を腕に込めて黒く変色させて戦っているのだけれど本当に人間なのかしら??」

霊夢が困惑するのも無理はない、本来であれば普通の人間が妖怪、しかもかなり手練れの武道を使う妖怪に対して互角、いやそれ以上にわたりあっている。

それだけで驚きに色を染めるのは充分であった。

「きつとあれは人間じゃないな、人間の姿をした妖精だろきつと。知らんけど」

「隙ありい！」

